

支部だより

平成十六年北海道朝陽会

北海道の夏は天国だ。特に昨年は、猛暑に襲われた東京の様子をテレビで見ながら、北海道に住んでいる幸せを噛み締めていた。そんな北海道の夏の一夜を、府立六中・新宿高校の同窓生という理由だけで集い、共に過ごすようになって昨年で二十一年。現在、北海道朝陽会の名簿には、旧制組十四名を入れて総計百十三名の名前が記されるに至っている。場所柄、転勤族が多数を占めていた(かく言う小生もその一員だった)が、近年は北海道定住組が着実に増えてきている。かつては、その大部分が北海道の大学に進学し北海道で就職というパターンであったようだが、最近では、国内や海外の各地で勤務した後富良野・美瑛に続く美しい丘陵地帯に洒落たログハウスを建てて移住された8梅谷俊一郎氏のような、新しい開拓者も増えてきている。そんな方々を含めて、昨年も例年どおり、七月の第一土曜日である三日、札幌



グランドホテル新館の最上階から夕暮れ迫る札幌の街を展望しながら、新宿の思い出や変貌ぶりに話の花を咲かせた。当日は二十四名が参加したが、中14伊藤尚蔵、中21遠藤象三の両先輩から、昨年度大蔵に入學したばかりの54戸田慎平君に至るまで、まさに世代を超えた集まりとなった。母校から遠く離れた北海道でも

同窓生に行き会うことがあるが、戸田君もまたま北大の20吉野教授のクラスに入ったことから、北海道朝陽会デビューとなったわけだ。

北海道は、昨年の駒大苦小牧の子園制覇や

北海道日本ハムの活躍などの半面、その経済には一向に回復の兆候が見られない。しかしながら、実際に暮らしてみると生活を楽しんでいる人の数が東京などより

余程多いように感じられる。世上、二〇〇七年問題などと団塊の世代が定年を迎えることに不安を抱く向きもあるが、地方で暮らせば所得は低くても楽しい生活が出来る、というのが私達の実感だ。将来に不安を抱く諸兄諸姉には是非、今年七月二日(土)の北海道朝陽会に参加して、事実をその目で確かめて欲しい。

(文責 幹事18山崎一彦 北海道朝陽会  
yamazaki@chamansu.or.jp)